
***君の為に* 【嫌われ】**

純々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

＊君の為に＊ 【嫌われ】

【Nコード】

N0836V

【作者名】

純々

【あらすじ】

『縁ちゃん……大好きだよ』

親友から届いた電話。その直後、彼女は屋上から飛び降りた——！！？

飛び降りた親友が通っていた『氷帝学園』。彼女はそこで陰湿なイジメにあっていた……。主人公・縁は、イジメの中心になっているテニス部に復讐を誓った……。テニス部の少年達＋マネージャーと主人公の悲しい争いが始まってしまった——。

氷帝で嫌われます。苦手な方はまわれ右でお願い致します。

屋上にて（前書き）

あらずじにも表記しましたが、嫌われ主人公の物語です。
嫌われが苦手な方、キャラが崩れているのを見たくない方は
まわれ右をしてください。

屋上にて

青く澄み渡った空の下——一人の少女がサボリの真っ最中だった。

「ああ……気持ちいい……」

太陽が照りつける、晴れた日の屋上。

ここほど学校の中に気持ちの良いスポットがあるだろうか!?

否! 無い!!

……そんなことを考えてしまうほど、今日はとても気持ちが良い。

「ううーん! サボリ最高!!」

みんなが一生懸命勉強している中サボるなんて、我ながら勇気のあ
る行動

だと思う。賞賛の拍手を頂きたいくらいだ。

さくらい えん
櫻井縁。 中学二年生。

好きなものは、昼寝と屋上と空。嫌いなものは、この学校……。

僕を簡単に説明すると、こんな感じだと思う。
ちなみに、成績は中の上。容姿も至って普通。

まわりの人間から言わせれば、「真面目で普通が取り柄の優等生」だそうだ。

それを友達から言われたとき、「普通が取り柄……？」と思わず疑問符を浮かべてしまった。そりゃ、そうだよ。もはや取り柄じゃないし。

そんな僕がなぜここにいるかというと……まあ、みなさんお気づきの通り

サボる為です。

今日のこの天気や空は最高だけど、僕の心はそれに反して最悪だった。

今日は一校時目から苦手な体育だったし、

二校時目は理科の問題を当てられて答えられなかったし、

おまけに今の時間は嫌いな先生の教科……！！

いつもは真面目に授業に取り組んでるけど、なぜだか今日だけはどうしても

授業に出る気にならなかった。

（きっと空が青いから、神様が僕にサボリのチャンスくれたんだよね……！！）

どうでも良いようなことを前向きに考えながら、再び寝転がるとふいにスカートの中の携帯が鳴った。

電話

屋上に鳴り響く、僕の好きなアーティストの着メロ。

本来ならば、校内では携帯を使うことを禁止されている。

が、どうせ自分はサボりままでしている身なのだし、そんな細かいことは

気にしてられない。

スカートのポケットに手をつ込んで携帯を抜き取る。

携帯に表示された着信相手は……

「ん？公衆電話……？」

（怪しい……。イタズラ電話とかだったら嫌だなあ……）

僕が止めるのを待っているPOPなメロディーはドラムの音が入りさらに明るく盛り上がる。

仕方が無く、通話ボタンを押し、携帯を耳にあてる。

「……もしもし？」

『……』

電話の向こうは静か。

こちらにも反応が来ず、しばらく沈黙が続いた。

「……」
『……』

このまま沈黙を続けるのには僕が耐えられないと思ったので、躊躇いながら口を開く。

「あの……イタズラですか？用がないなら切りますよ？」

『……』

向こうは沈黙。

イタズラ電話だな、と何も言わずに切ろうとした、その時——
沈黙が終わった。

『えん……ちゃん』

「え？……うそ……」

空？」

ずっと沈黙が続いていた電話の相手は、僕の親友だった。

「さよなら」

「どうしたの空？今、授業中だよね？」

心中でそれは自分もだろう、とツツコンでおく。

「それとも僕みたいにサボリ？珍しいね、空がサボるなんて。」
『……』

僕一人ベラベラと喋ってしまっている。
嫌な思いをさせたかな……と心配していると、空が口を開いた。

『縁ちゃん……』

「あーっと……空ゴメン。僕、ベラベラ喋りすぎたよ」

『縁ちゃん……ん』

「空……？」

ベラベラ喋ってから気付いた。

さっきから空は、同じことしか言っていない。

僕の名前しか、呼んでいない。

なぜだか分からないけど、嫌な予感がした。

「……空、どうかした？」

『縁ちゃん……私ね。私……』

空の声が震えてる。

(空……泣いてる?)

「何があったの? 空?」

『私ね、もう駄目なんだ』

「え?……何が……」

『みんなを傷つけて、悲しませて……だから駄目なの。縁ちゃん……』

僕の嫌な予感は的中しそうだった。

「ちょっと待って! 今どこにいるの!?」

焦った僕の声に対して、空はひどくか細い……今にも消えてしまい
そうな声で
答えた。

『屋上……』

——駄目だ!!

「屋上で……何をするつもりなの？」

『……』

問いかけに空は答えない。

きっとそれは、分かっているから。

もし答えたら、僕が何というか知っているから。

答えない。

僕は、自ら恐れている事実を言う。

「空……飛び降りるつもり？」

僕の言葉に、空が少し笑ったような気がした。

そんな気がしたから、きっと冗談だと——そう思ったのに……

『縁ちゃん、今までありがとう。私、ずっと縁ちゃんに救われてた

……

「あんなこと」があっても笑えてたよ。」

「空、待ってよ……待って、待って……!!」

(神様、どうか空を止めて)

僕の言葉じゃ、きっと空は止まらない。
止めたいのに、言葉が口から出てこない。

『縁ちゃん……』

「大好きだよ」』

空の声が、耳元で聞こえたような気がした。

「空あ————!!」

屋上には、
虚^{むな}しい僕の叫びだけが響いた。

教室にて（前書き）

しばらく主人公と親友のターンです……；
すみません！！テニプリキャラはもう少しで登場予定です（汗；）

教室にて

屋上の階段を駆け下りて、急いで自分の教室に走り込む。

教室は丁度授業が終わったところのようで、先生もおらずみんなは給食の準備をしていた。

いきなり教室に走ってきた僕をみんなは怪訝そうな顔で見えていたが、すぐ口々に「どうしたの？」と声をかけてきた。

「ちょっとぼ——…私、具合悪いから早退するね。」

「えー！？次の時間体育だよ！縁がないと…」

「そうだよ！縁がないとウチのクラスのバレー、ヤバイじゃん！」

普段だったら、みんながこう言ってくれるのだから……と早退なんかしないのだが、今日は違う。
早く、行かなきゃ。

「あ、あの……でも熱、あるし……」

苦し紛れの言い訳。さすがの僕も焦っているのだ。
はつきり言って、みんなに構っている余裕は、無い。

そんな僕の焦りに気付いたのか、一人の女子が僕の正面に立った。

「美和子……。」

美和子はクラスでは一番仲の良い友達で、よく僕のことを気にかけてくれている。
優しい女の子だ。

その美和子が、おもむろに自分の手を僕の額にあてた。

「ん、本当だ。^{ほんと}熱あるみたい。あたし、玄関まで送るよ」

その言葉に少し驚いた。本当は熱なんて無いのに、みんなに疑われないように
してくれたんだ……。

（美和子……。）

「え、だったら私も縁のこと送る！」

「私もー」

「あたしも！」

みんなが名乗り出てくれる中、美和子は僕の腕にくっついて、

「だーめ！縁はあたしの！行こ、縁♪」

と言い、僕を無理矢理廊下まで引っ張っていった。

事実

玄関まで、僕を引っ張っていた美和子の腕が離れた。

「美和子、ありがとう」

素直にお礼を言うと美和子は優しく微笑んだ。

「いいよ。縁、なんだか大変そうだし」

「うん……」

「行きなよ、なにかあったらあたしがなんとかするから」

美和子の姉御な言葉に涙が出そうになった。
でも、今泣いているヒマは無い。

（行こう。）

僕は走って校門を駆け抜けた。

走る走る走る……僕は必死に駅に向かった。
向かい風なので、ときどきスカートが風に舞ったが、

どうせスパッツをはいている、なんてことは無い。

必死に走って、駅が見えるところまで走ってきた所で、携帯の着メロが鳴った。

ひょっとしたら空なのではないか、まだ飛び降りていないのではないかと期待して

携帯の表示を見たが……違った。

電話の相手は、僕の教育係の榎名^{まぎな}さんという女性だった。少し息を整えてから通話ボタンを押した。

「もしもし？」

『急にお電話してしまって申し訳ないです、お嬢』

「大丈夫。何？」

『先ほど、お嬢のご友人の空様のお母様からお電話がありました』

「……え？」

『すぐにお嬢から電話をしてくれとのことでした。……お嬢？』

黙っている僕を不思議に思ったのか、榎名さんが呼びかける。

（おばさんから……っていうことは、やっぱり……！）

自分の顔が青ざめていくのが分かったような気がした。

「番号!! 槇名さん、おばさんの番号教えて!!」
『承知致しました。』

槇名さんから空のお母さんの番号を聞いて、お札を言ってから電話を切った。
震える手で教えて貰った通りの番号を入力して、電話をかける。

「トゥルルルル……」

（早く、出て……）

「トゥルルル……」

（お願い……）

『「トゥルル……ガチャ」……もしもし?」
「おばさん……お久しぶりです。縁です」

『縁ちゃん……!!」
「……」

おぼさんが次に言う言葉を、僕は知っている。

『空が……空が!!!!』

知って、しまっているんだ。
認めたくなかったけど……

『空が飛び降りたの……』

これは 事実

夢

『……………う……………お……じ』

誰かが、僕を呼んでいる気がする。

（誰……………あ、そっか……………これ、夢か）

きつと、夢なんだ。

私がサボったのも、

学校を早引きしたのも、

おばさんに電話をかけたのも、

空が、屋上から飛び降りたのも。

（ホント……………悪夢、だった……………）

『じょ……………う、え……………』

うるさいなあ。

少しは、寝せてよ……………。

その時、誰かの

『夢にしないで』

という声が耳に入った。

「『縁お嬢！！！』」

「え、あ……」

目を開けると、眩しいほどの光と眼鏡をかけた綺麗な女性の顔が視界に入った。

その女性を、榎名^{まさな}さんだと気がつくのに、10秒かかった。

そこで、ようやく自分が寝ていて……夢を見ていたことに気がついた。

「大丈夫ですか？ずいぶんとうなされていましたよ」

「ああ……なんか、夢見てたから……」

そう言いながら、まだ眠さが抜けきっていない頭が活動し始めた。

（あっちが夢……。そうだよ。昨日のあれは——夢じゃない）

親友の空が飛び降りた。

これが夢だったらどれだけ楽になったことだろう。

でも、神様は僕のことを楽にはしてくれないみたいだ。

「お嬢、やはり無理なさらない方が……」

「僕の体のことは、良いの。早く行こう」

僕は、槇名さんの車の窓から見える、大きな病院を見つめた。

車から降りて、さっきよりも近くにそびえ立つ病院を見上げた。

「じゃ、槇名さん。僕行くから、ホテルよろしくね」

振り向いて、車の窓から僕のことを見つめる槇名さんに呼びかける。

槇名さんは、相変わらずの無表情で「承知致しました」と無機質な返事を返してきた。

「それじゃあ、後でまた——」「縁様」

僕の言葉を遮り、槇名さんが口を開いた。

普段は絶対に「縁様」なんて呼ばないのに……と思い、槇名さんの顔を見ると

その顔には、明らかに心配の色が浮かんでいた。

「無茶はしないでくださいね」

そう言うのと、たちまちいつもの無表情に戻り、ひどく冷静な声で

「貴方も入院しますよ」

と呟いた。

「……洒落になんないわ」

今の僕には、本当に実現しそうな事に思えてくる。

（あー……なんか怖くなってきた……）

槇名さんが無表情で言うど、死亡宣告にも聞こえてきて身震いする。

心の中で槇名さんに「そうならないように気をつけます」と呟いて、僕は病院に向かって歩き出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0836v/>

君の為に 【嫌われ】

2011年10月8日23時04分発行